

ノルウェーにおける地域スポーツクラブと学校の連携 —クリスチャンサン・オリエンテーリングクラブの事例より—

松澤俊行¹⁾ 杉浦 恭²⁾

1) 愛知教育大学大学院保健体育専攻 2) 愛知教育大学保健体育講座

The cooperation between community sports club and local schools in Norway — A case study of Kristiansand Orienteering Club —

Toshiyuki MATSUZAWA¹⁾, Takashi SUGIURA²⁾

1) Graduate Student

2) Department of Health and Physical Education

Key words: オリエンテーリング, 地域スポーツクラブ, 総合学習

1. 研究の目的

日本では、学校と企業の部活動がスポーツ基盤を支えてきた。しかし、近年、少子化や不況を経ての企業経営の合理化が進み、学校でも企業でも部活動が衰退傾向にある。代わって、地域スポーツクラブに寄せられる期待が増している。2000年にはスポーツ振興基本計画が策定され、地域スポーツクラブの設置推進に拍車がかかった。

とはいえ、こうした施策が十分な効果を挙げているとはいえない。新と中澤は、「近年の国によるスポーツ政策は失敗したのではないかと疑問を投げかけ、「地域クラブへ過剰な期待を寄せるあまり、その仮想敵としての学校・企業スポーツを過度に攻撃しすぎたのではないかと」（新・中澤 2006, 181頁）と反省を促す。そして、将来のスポーツ環境の構築策として「企業・学校におけるスポーツ環境を活用しながら、企業や学校がただ抱え込むのではなく、地域の人びとへ開放すること」（新・中澤 2006, 183頁）を提言している。

しかし、各種調査結果¹⁾からは「実は不況といった理由以上に、企業側が会社の内部でスポーツをやらせることを意味のない行為だと認識してい

る」（新 2003, 76頁）ことも浮かび上がる。「企業が完全に手を引いたら、いくら地元で支持されているチームでも存続は苦しいということ」（左近充 2002, 65頁）を物語る事例も、近年数多く見られる。企業によるスポーツ支援状況は、一層悪化する可能性があると言え、学校と地域との連携に期待が集まる。

そこで本研究では、地域スポーツクラブが学校との連携の下、人々のスポーツを支える組織として十分な役割を果たしていると思われるノルウェーの事例を調査し、その特徴を考察することを目的とした。その上で、日本の地域スポーツクラブのあり方について見直してみることにした。

2. 研究の方法

本研究では、「地域スポーツクラブ」を「非営利目的で結成され、どんな年齢でも加入可能な、単一種目のスポーツクラブ」と定義し、その一形態である「地域オリエンテーリングクラブ」を研究対象とした。その中でも特に、オリエンテーリング先進地域であるノルウェーの地域オリエンテーリングクラブに注目した。

まず、Norges Idrettsforbund og Olympiske

Komité (NIF: ノルウェースポーツ連盟) が2004年に発行した報告書 “*Sport and Physical Activity in Norway*” 等の文献を基に、ノルウェーのスポーツの歴史や組織構造を調べた。次に、ノルウェー国内の強豪「クリスチャンサン・オリエンテーリングクラブ」の事例から、地域オリエンテーリングクラブの実状を明らかにした。クリスチャンサン・オリエンテーリングクラブの事例調査は、関係者に対するインタビューにより実施した⁴²⁾。なお、学校との連携行事の一部には、筆者(松澤)自身も運営に加わり、状況を観察した。

3. ノルウェーのスポーツの歴史と組織構造

ノルウェーは、近現代のスポーツを語る上で無視できない国である。ノルウェーで1960年代後半

から始まったスポーツ普及運動の「トリム運動」(Trimm) は、急速にヨーロッパ各地に波及し、その後の国際的な「みんなのスポーツ」運動の端緒となった(金崎 2000, 42-43頁)。

また、ノルウェーは競技スポーツにおいても国際的な強豪国である。オリンピックでは、特に冬季において大会ごとにノルウェーの活躍が見られる。ノルディックスキー、バイアスロンといった競技はノルウェーの「お家芸」とも言える。ノルウェーの冬季オリンピック通算獲得メダル数は、2006年トリノ大会終了時点で、東西ドイツ時代を合算したドイツ、旧ソ連時代を合算したロシアに次いで3位に位置している⁴³⁾。

このような歴史と伝統を有するノルウェーのスポーツは、現在、下記のような組織構造で運営さ

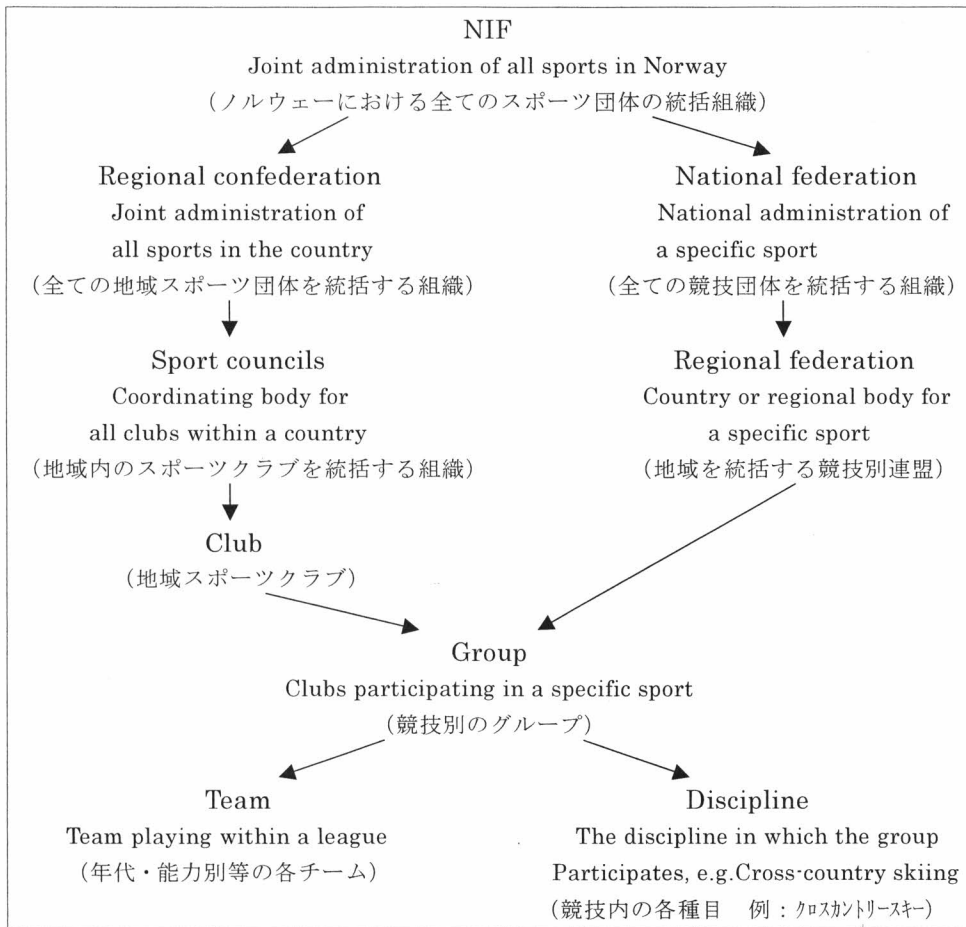


図1 ノルウェーのスポーツ組織
 (“Sport and Physical Activity in Norway” 中の図に日本語訳を加えて作成)

れている。

中央のスポーツ統括機関であるノルウェースポーツ連盟の下に、スポーツごとの統括団体が位置づけられ、55団体が加盟している。そのスポーツごとの統括団体の下に各地域の特定スポーツ統括団体、そして各スポーツクラブが位置する。

また、ノルウェーには19の県⁴⁴があり、ノルウェースポーツ連盟の下には各県のスポーツ統括団体も位置付けられる。各スポーツの地域クラブは、各県のスポーツ統括団体の下部組織でもある。なお、複数の種目を実施する総合スポーツクラブの場合は、「各スポーツの部門」ごとに特定スポーツの統括団体の下部組織と位置付けられる。

ノルウェースポーツ連盟の下部組織であるクラブには、ノルウェースポーツ連盟の定める規程に準じたクラブ内規程を定めることが義務付けられている。規程は、クラブ内で定める手順に従って改訂することもできるが、上部組織に改訂の申請を行い、承認を得なければならない。こうした仕組みは、煩雑である一方で、逸脱した活動の防止となる。各クラブの責任感を醸成すると共に、社会的信用を保証する制度と言える。

安田（1993, 74頁）は、ノルウェースポーツ連盟の傘下には、1983年時点で45種目のスポーツ連盟が加盟しており、その下には10,513のクラブと、156万人のメンバーが登録していると報告した。ノルウェースポーツ連盟の集計によると、2003年時点のノルウェースポーツ連盟傘下のスポーツクラブは12,334クラブ、加盟員は157万9,711人であった。これらのデータからは、次のことが読み取れる。

- ①ノルウェースポーツ連盟傘下のスポーツクラブや登録者の実数が、詳細に把握されている。国家によるスポーツ団体の管理・統制が行き届いている。
- ②国の全人口の3割強に当たる人数が国の連盟傘下のスポーツクラブに所属している。ノルウェー国民のスポーツ熱は高い。
- ③近年20年間のノルウェースポーツ連盟登録人口は大きく増加していないものの、傘下のスポーツ連盟とクラブは増えている。近年のノルウェー国民の実施スポーツは多様化している。

以上、ノルウェーのスポーツの歴史と組織構造を概観した。次段以降では、地域オリエンテーリングクラブの事例を通じて、ノルウェーにおける地域スポーツクラブの社会的役割を検討する。

4. オリエンテーリングの歴史

ここで、オリエンテーリングとはどのようなスポーツで、どのような歴史を経て現在に至っているかを確認しておきたい。

オリエンテーリングは山野や森林を競技場とする個人スポーツである。「ナビゲーションを伴うクロスカントリー走」と説明でき、勝敗はタイム（速さ）によって決する。

オリエンテーリング発祥の地はノルウェーとされる。元来、軍事目的で行われた森の中のナビゲーションを競技化したオリエンテーリングは、当初は雪中で、スキーを履いて行われた。世界初の競技会とされるスキーでのオリエンテーリング大会は、1897年5月13日にノルウェーのベルゲンで開催され、翌年にはオスロでも大会が開催された。ちなみに、ノルウェーはスキー競技発祥の地でもある。

ノルウェーよりも早く、世界で初めてフット・オリエンテーリング（走るオリエンテーリング）の大会を開催した⁴⁵とされるスウェーデンでは、1912年に、スウェーデン陸上競技連盟の一種目としてオリエンテーリングが位置付けられた。1919年7月には、ストックホルム陸上競技連盟がオリエンテーリング大会を開催、220人の参加者を集めた。その後もオリエンテーリングの普及が進んだスウェーデンでは、陸上競技連盟からの独立の気運が高まり、1938年のスウェーデンオリエンテーリング連盟創設に至った。スウェーデンオリエンテーリング連盟では、創設当時すでに630のクラブが傘下となっており、16,000人の加盟員が登録していた。

スウェーデンオリエンテーリング連盟が創設された1938年からは、毎年スカンジナビア半島で競技会が開催されるようになり、ノルウェーでは1945年にオリエンテーリング連盟が設立された。1946年には北欧オリエンテーリング協議会が発足し、オリエンテーリングの規則作成などが進んだ。

その後、オリエンテーリングはヨーロッパを中心に北欧以外の国々にも広がり、1961年に国際オリエンテーリング連盟（略称 I O F）が組織された。I O F 創設当時の加盟国はノルウェー・スウェーデン・フィンランド・デンマーク・東ドイツ・西ドイツ・スイス・チェコスロバキア・ハンガリー・ブルガリアの10カ国であった。2008年3月現在の I O F 加盟国は正加盟49カ国・準加盟20カ国の合計69カ国で、加盟国の所在地はヨーロッパにとどまらず世界各地に広がっている。

1966年にはフィンランドで第1回世界オリエンテーリング選手権大会が開催された。2007年に24回目の開催を迎えた世界選手権は、19回大会までは隔年開催であったが、2003年以降毎年開催となった。当初個人戦1種目、リレー形式で行われる団体戦1種目の合計2種目で競われた世界選手権は、現在スプリントディスタンス・ミドルディスタンス・ロングディスタンスの個人戦3種目とリレーの合計4種目で競われている。

I O F はフット・オリエンテーリングの世界選手権の他、「スキー・オリエンテーリング（スキーO）」「マウンテンバイク・オリエンテーリング（マウンテンバイクO）」「トレイル・オリエンテーリング（トレイルO）」の世界選手権も開催している。1975年に世界選手権が始まったスキーOは「スキーを履いて行うオリエンテーリング」、2002年に世界選手権が始まったマウンテンバイクOは「マウンテンバイクに乗って行うオリエンテーリング」である。2004年に世界選手権が始まった「トレイルO」は読図の正確さを競う競技で、他の3種目ほど身体運動能力の高さは求められない。トレイルOは障害者へ普及するために考案された競技であり、大会では障害者も非障害者も同じルールの下、競い合っている。

日本にオリエンテーリングが導入されたのは1966年である。日本は、1969年に I O F への加盟承認を受け、1976年の第6回世界選手権大会に初出場した。さらに2005年の第22回世界選手権大会開催国となっている。この年には、フットOと共にトレイルOの世界選手権も日本（愛知県）で開催された。さらに、日本はスキーOの2009年世界選手権の開催地（北海道）にも決定しており、ア

ジアのオリエンテーリング界を牽引する国としての地位を築いている。

5. ノルウェーの地域オリエンテーリングクラブに関する調査

前段で記したように、ノルウェーはオリエンテーリング発祥の地である。また、2007年までに24回行われた世界オリエンテーリング選手権で、スウェーデンに次ぐ優勝回数を誇る強豪である⁴⁶⁾。ノルウェーは、スウェーデンと共に、100年以上に渡って「オリエンテーリング界の盟主国」であり続けている。

ノルウェーでは、オリエンテーリングは国民に浸透したスポーツであり、現在も水泳と共に小学校体育における必修の課題とされている。そのため、全ての児童がオリエンテーリングに触れるものの、学校のクラブ活動は日本のように盛んではなく、放課後の校内でオリエンテーリングが盛んに行われているわけではない。小学生がオリエンテーリングを継続的に実施する場合は、地域のオリエンテーリングクラブに加入することになる。

もちろん、学区内のオリエンテーリングクラブの活動が盛んな地域ばかりではなく、オリエンテーリングを覚えた小学生全てに継続の機会が与えられているとは限らない。ノルウェーでも、スポーツ好きの子どもの多くがサッカーなど国際的な人気スポーツに流れるという事情は他のヨーロッパ諸国と同様である。そうした中、筆者が滞在したクリスチャンサン市では、地域オリエンテーリングクラブが学校と連携を図りながら、クラブと学校の双方に有益となる取り組みがなされていた。ここでは、クリスチャンサン市最大のオリエンテーリングクラブであるクリスチャンサン・オリエンテーリングクラブの概要と、学校との連携について報告する。

5-1 クリスチャンサン・オリエンテーリングクラブの概要

クリスチャンサン市は、人口約75,000人のノルウェー第5の都市である。ノルウェー最南端に位置し、スカゲラック海峡を隔ててデンマークと向かい合っている。総面積277平方キロメートル中の150平方キロメートルが森林であり、アウトド

アスポーツは水上をフィールドとしたものも陸上をフィールドとしたものも一通り楽しめる環境にある。

クリスチャンサン・オリエンテーリングクラブは、こうした恵まれた地理的背景の中で活動を続けるクラブである。前身の総合スポーツクラブから1973年に独立し、現在200人余りの会員を有する。ノルウェー国内でも有数の大型オリエンテーリングクラブと言える。男性と女性の比率は6対4で、半数が16歳未満の会員である。クラブの予算は年間120万ノルウェークローネ（調査時の換算で約2,400万円）であり、収入源はクラブ員の支払う会費（1人当たり年間500ノルウェークローネ）、スポンサー収入、公的補助金、クラブで作成したオリエンテーリング用地図の売り上げなどである。

クリスチャンサン・オリエンテーリングクラブ会員の属性は、年齢、性別以外も多岐に渡っている。世界チャンピオン経験者の現役ノルウェー代表選手もいれば、競技を全く行わない会員もいる。競技に参加しない者もクラブに登録する背景には、「家族会員制度」の存在がある。「家族会員制度」は、2人相当分の会費1,000クローネを支払えば一家族から何人でもクラブへ登録できる制度である。この制度を活用し、親が子供にオリエンテーリングを教えて一緒に会員となるケースや、熱心に競技を行う子供の活動を手伝えるために親も会員となるケースが見られる。このような会員の多様性により、クラブ内は「地域社会の縮図」の様相を呈している。

多くの会員を抱えるクリスチャンサン・オリエンテーリングクラブであるが、北欧の有力オリエンテーリングクラブとしては珍しく、クラブハウスを保有していない。他の有力クラブには、会員同士の顔がお互いに見える活動を目指し、「クラブ所在地の町に住んでいること」を原則的な入会条件とし、クラブハウスを交流拠点とするクラブもある。一方、クリスチャンサン・オリエンテーリングクラブでは、市外等、遠隔地に居住する者の入会も認められている。遠隔地に住む会員は、日常的に他会員と活動を共にすることはない。それでも、節目の重要な行事には参加し、会員とし

での役割を果たしている。

クリスチャンサン・オリエンテーリングクラブでは、クラブの意思決定機関である「総会」において会長その他役員が決定される。会長の下には、以下の4つのグループが置かれ、それぞれの目的に沿った活動を行っている。

①エリートグループ

高い競技能力を持つ選手の強化を行うグループである。グループを統括するリーダーの他、専任のトレーナーがおり、ハイレベルなプログラムが提供される。このグループのために、すなわち有力選手の強化支援のために、クラブの年間予算の半分に当たる60万クローネ（約1,200万円）が使用される。使途は、「グループ所属の選手たちの大会の参加費・遠征費の補助」「合宿の運営費」などである。

②ジュニアグループ

ジュニア選手の育成を行うグループである。対象世代の性格上、「強化」というよりは、大会への参加を促したり、トレーニングの方法を教えたりといった「競技者としての意識付け」といった活動が行われている。

③地図作成グループ

「最も精密なアウトドア地図」と言われるオリエンテーリング専用地図（Oマップ）の作成を行うグループである。グループ内には、地図作成会社に籍を置きつつ、仕事としてOマップの作成を行うプロフェッショナルの会員もいる。

④常設コース管理グループ

いつでも誰でも挑戦可能なコースをクリスチャンサン市内の森に設定するグループである。常設コースでは、簡単なものから難しいものまで多数のコースが設置され、あらゆる習熟度の愛好者が興味を持って挑戦できるようになっている。コースは目新しさを損ねないよう、随時変更される。地図は学校、銀行、ガソリンスタンド、商店等、市内各所で販売されている。

上記4グループの他にも、クラブ内には総務、会計、広報といった各業務の担当者が存在し、総会で選出されている。図2に、クリスチャンサン・オリエンテーリングクラブ内の組織を簡単にまとめた。

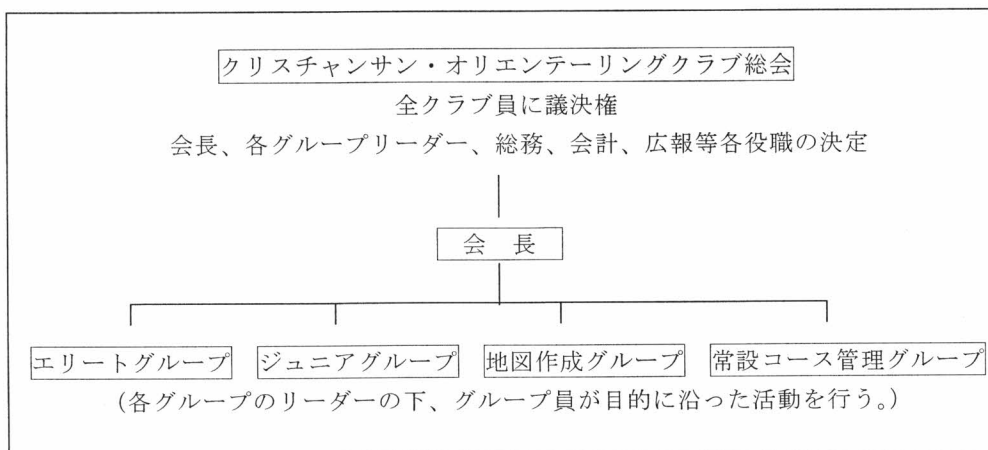


図2 クリスチャンサン・オリエンテーリングクラブ組織図
(クラブ員へのインタビューを基に作成)

5-2 クリスチャンサン・オリエンテーリングクラブと学校の連携

前項で示したような特色を持つクリスチャンサン・オリエンテーリングクラブが、どのような形で学校と連携しているかを見ていきたい。

① 授業への協力)

先述したように、ノルウェーではオリエンテーリングが授業の教材として扱われる。授業を行う際、競技としてのオリエンテーリングを経験したことがない教師に代わり、コース設定や資材の設置、指導等を行うことがある。

② 市内小学生オリエンテーリング選手権大会の開催)

クリスチャンサン市内には、37校の小学校がある。クリスチャンサン・オリエンテーリングクラブでは、全小学校に対して「学校周辺の地図を作成し、校内オリエンテーリング大会を開く」ことを過去に提案した。その提案に対して13校が賛同し、各校で「校内オリエンテーリング大会」が開催された。学年ごとに順位を付け、各学年の優勝者が決定された。そして後日、優勝した子どもたちを各学校の「代表」として市内中心部の森に集め、決勝大会が開催された。この決勝大会で好成績を修めた学校には、クリスチャンサン・オリエンテーリングクラブの有名選手が講師として訪問し、「オリエンテーリング教室」を開くという特典が与えられた。

③ 大型大会に合わせた小学生向けオリエンテーリング大会の開催)

2006年8月下旬、クリスチャンサン市中心部から220km離れた町ハウデンで、その年の「ノルウェー選手権大会」が開催された。この大会の主管団体はクリスチャンサン・オリエンテーリングクラブで、120名のスタッフ中100名が同クラブ会員であった⁴⁷⁾。

4日間に渡り4種目が競われるノルウェー選手権の開幕日に、クリスチャンサン・オリエンテーリングクラブが運営主体となり、近隣3校の児童を対象とした小学生向けオリエンテーリング大会が開催された。参加した児童は合計約110名であった。

この大会では、スタートとゴールを、ノルウェー選手権のスタートとゴールと同じ会場内の観客席から見える地点に設定し、機材も選手権大会と同じものが使用された。児童たちは、自分自身が走り終えた後、観客席からノルウェー選手権を観戦し、選手たちに声援を送った。ゴール付近では競技を終えた選手にサインを求める児童たちの姿が見られた。そして翌日には、大会風景を児童たちの手で描いた絵画が、表彰式会場となった体育館内に展示され、大会に華を添えていた。

以上は、より豊かなスポーツ愛好の機会を児童たちに提供するため、クラブ側が尽力しているケースである。クラブ側にも、「クラブの宣伝」「競

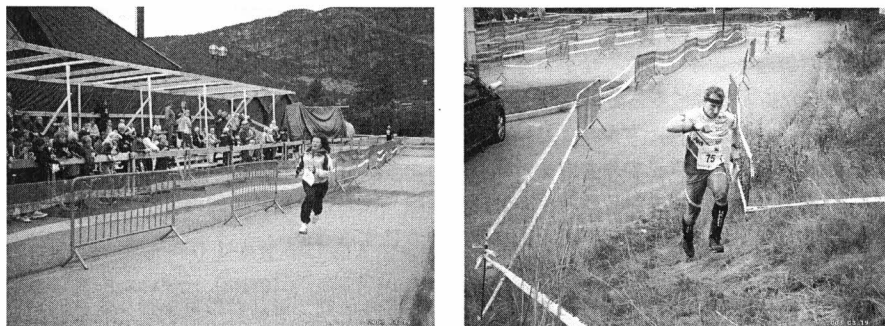


図3 小学生向け大会（左）とノルウェー選手権大会（右）の写真
（大会会場にて松澤が撮影）

技者の発掘」といったプラスの効果が期待できる。実際に、②の大会後、多くの小学生がクラブに入会した。前項で示したように、クリスチャンサン・オリエンテーリングはクラブハウスを持たないが、その代わりに資材管理やトレーニング前後の更衣所として学校の空き教室を借りている。学校への協力を惜しまないクラブ側の姿勢が、学校側の厚意を引き出し、両者の良好な関係につながっていると考えられる。

6. 考察

クリスチャンサン・オリエンテーリングクラブは、学校と以下のような形で連携していた。

- ・小学校授業でオリエンテーリングが行われる際は、地域オリエンテーリングクラブが技術協力を行う。
- ・クラブ所在地の小学生を対象としたオリエンテーリング大会を企画し、運営する。小学生のみを対象とした大会の他、国内選手権大会に併催し、観戦の機会を提供する大会も実施する。その後、オリエンテーリングを継続したい児童がいる場合、クラブが受け入れ、機会の提供を行う。
- ・小学校側は、校内のスペースを、地域オリエンテーリングクラブの資材庫や更衣室として開放する。

こうした連携は、学校教員にも、児童生徒にも、クラブ員にも有益なものとなっている。そして、国のスポーツ環境を、ひいては社会環境を豊かにすることに寄与している。他国でも、地域スポーツクラブのあり方を考える上でのモデルとなりえ

る事例と考えられる。

それでは、日本の地域スポーツクラブが、学校とこのような協力体制を築くことは可能であろうか。平成10年（1998年）の学習指導要領改訂により導入された「総合的な学習の時間」に注目して考察したい。

学習指導要領上では、「総合的な学習の時間」の展開に当たったの配慮事項の一つとして「地域の人々の協力」を得ることを挙げている（図4）。また、体験的な学習も重視している。地域スポーツクラブと学校が協力してプログラムを計画する、という展開方法が可能な時間である。

「総合的な学習の時間」でスポーツを行う場合は、体力づくりや運動技能の向上が強く求められない代わりに、学び方やものの考え方を身に付けることが求められる。そうした能力を身に付ける上では、スポーツのフィールドという開放的な環境で、地域スポーツクラブに所属する多世代の近隣住民とコミュニケーションを取ることが、非常に有益であると考えられる。また、ノルウェーの事例に見られたように、体験したことを絵画として描いたり、作文に残したりすることで、体育以外の他教科との関連付けも行える。

児童が地域スポーツクラブに興味を持ち、入会して活動に参加するなどの形でコミュニケーションが継続されれば、学習のねらいは一層よく達成され、地域スポーツクラブの活動の活性化にもつながるであろう。「ゆとり教育」の見直しに伴い、今後、縮小の議論が進むことが予想される「総合的な学習の時間」であるが、その理念は評価されるべきである。地域スポーツクラブと学校との連

ねらい

- (1) 自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。
- (2) 学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること。
- (3) 各教科、道徳及び特別活動で身に付けた知識や技能等を相互に関連付け、学習や生活において生かし、それらが総合的に働くようにすること。

配慮すべき事項

- (1) 目標及び内容に基づき、児童の学習状況に応じて教師が適切な指導を行うこと。
- (2) 自然体験やボランティア活動などの社会体験、観察・実験、見学や調査、発表や討論、ものづくりや生産活動など体験的な学習、問題解決的な学習を積極的に取り入れること。
- (3) グループ学習や異年齢集団による学習などの多様な学習形態、地域の人々の協力も得つつ全教師が一体となって指導に当たるなどの指導体制について工夫すること。
- (4) 学校図書館の活用、他の学校との連携、公民館、図書館、博物館等の社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携、地域の教材や学習環境の積極的な活用などについて工夫すること。
- (5) 国際理解に関する学習の一環としての外国語会話等を行うときは、学校の実態等に応じ、児童が外国語に触れたり、外国の生活や文化などに慣れ親しんだりするなどの小学校段階にふさわしい体験的な学習が行われるようにすること。

図4 総合的な学習のねらいと学習を行うに当たって配慮すべき事項
(文部科学省 1999, 『小学校学習指導要領解説 総則編』より)

携を促す可能性も有している「総合的な学習の時間」には、学校教育の充実と共に、日本のスポーツ環境、社会環境を充実させる役割も期待できる。

7. おわりに

以上、他国の事例を参考にしつつ、日本の地域スポーツクラブと学校の連携の可能性について考察した。

事例として取り上げたクラブが位置するクリスチャンサン市内には、人口2,000人当たり1校に該当する37校の小学校がある。クリスチャンサン市内の小学校は、総じて日本の小学校よりも学区が小さく、児童数が少ない。そのため学校と地域のつながりは強く、お互いの顔が見えやすい。学校と地域スポーツクラブの連携を行う上での環境は日本よりも恵まれている。そうした事情も勘案しつつ、日本の教育環境、スポーツ環境の下で効果を発揮する具体的な方策について検討することを今後の課題としたい。

<註>

註1 例えば、「景気が回復したら、閉鎖したス

ポーツチームの活動再開を考えているか」という朝日新聞による調査に対し、「考えている」と明快に答えた会社が3%しかいなかったことが報告されている。(新, 2003 76頁)

註2 筆者(松澤)は、2006年8月に3週間、クリスチャンサン・オリエンテーリングクラブ有力会員の家にホームステイし、クラブの行事に参加しつつ調査を行った。詳細は愛知教育大学卒業論文「地域オリエンテーリングクラブによる若年競技者養成に関する基礎的研究—ノルウェー・クリスチャンサンオリエンテーリングクラブの事例より—」(松澤, 2007)に示されている。

註3 1位はドイツで328個(統一以前の東西ドイツの獲得数も合算)、2位はロシアで293個(ソ連時代の獲得数も合算)。参考までに、日本の冬季オリンピックメダル獲得数は32個である。

註4 首都であるオスロは「県」とは扱われないため、「1都18県」との表現する方が、より適切である。

註5 1907年にフット・オリエンテーリングの最初の大会が開かれた。

註6 世界選手権通産優勝回数はスウェーデン38回、ノルウェー34回である。ちなみに、ノルウェーの人口（約460万人）はスウェーデンの人口（約910万人）のおよそ半分であり、国内のオリエンテーリング協会登録人口も3割ほど（スウェーデン約10万人に対し約3万人）である。

註7 エリートグループの選手たちはノルウェー選手権獲得を目指して大会に出場するため、大会運営に関わっていなかった。

International Olympic Committee

(IOC：国際オリンピック連盟)

<http://www.olympic.org/uk>

International Orienteering Federation

(IOF：国際オリエンテーリング連盟)

<http://www.orienteeing.org/>

<引用・参考文献>

新雅史・中澤篤史 2006, 「サッカーくじと共倒れする日本のスポーツ環境」, 『中央公論』, 中央公論社, 175-183頁。

新雅史 2003, 「企業スポーツとは何（だったのか?）」, 『現代スポーツ評論』9号, 創文企画, 75-89頁。

金崎良三 2000, 『生涯スポーツの理論』, 不昧堂。

松澤俊行 2007, 「地域オリエンテーリングクラブによる若年競技者養成に関する基礎的研究ーノルウェー・クリスチャンサンオリエンテーリングクラブの事例よりー」, 愛知教育大学卒業論文。

左近充輝一 2002, 「企業スポーツの新たな可能性ークラブ化は成功するか」, 『現代スポーツ評論』6号, 創文企画, 58-69頁。

安田正二 1993, 「北欧のスポーツ組織」北欧スポーツ研究会編『北欧のスポーツースポーツは共有財ー』道と書院, 65-74頁。

文部科学省 1999, 『小学校学習指導要領解説総則編』。

Norges Idrettsforbund og Olympiske Komité

(NIF：ノルウェースポーツ連盟) 2004,

Sport and Physical Activity in Norway.

<参考ウェブサイト>

駐日ノルウェー大使館

<http://www.norway.or.jp/>